

あるユダヤ系ドイツ人ゲルマニストの生涯——序章

Das Leben eines jüdischen deutschen Germanisten : Die Einleitung

飯 塚 公 夫

要 旨

ジャン・パウル（1763-1825年）の研究者といえは必ず第一に挙げられるエドゥアルト・ベーレント（1883-1973年）。ある在米ドイツ人ゲルマニストとの彼の往復書簡が2013年に出版された。両親ともユダヤ人であったベーレントは、ナチス時代亡命を余儀なくされる。その助力を求めたことから二人の文通は始まる。結果的にベーレントは彼が送ってくれた身許引受保証書のおかげでスイス・ジュネーヴへ逃れることができたのだが、亡命ユダヤ人碩学と親ナチス・反ユダヤナショナリストの野心的若手学者とのことばのやり取りは、時代から来る緊張感と二人の個性から来るそれとが綱交ぜになって、ドラマチックなものとなっている。

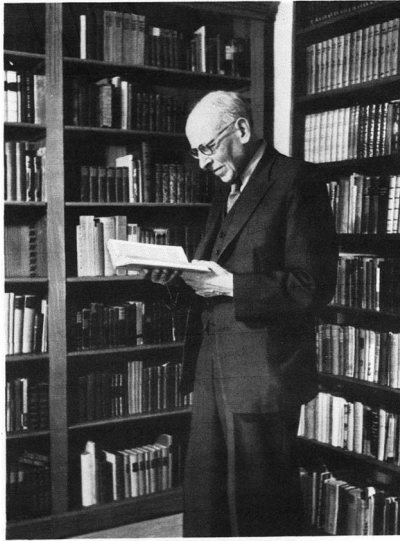
キーワード

ジャン・パウル, ゲルマニスト, E・ベーレント,
ナチス亡命ユダヤ人, 反ユダヤ主義

(1) 静かな研究者

いかにも静かそうな人である。声を荒げることなどあるとは思えない¹⁾。写真を見ても筆跡を見てもそうだし、この人の生涯そのものからもそういう印象を受ける。

この人、エドゥアルト・ベーレント（Eduard Berend）（1883-1973年）、
『ジャン・パウル全集・資料校訂版（Jean Pauls Sämtliche Werke, Historisch=



Eduard Berend

ジャン・パウル資料室のベレントとそのサイン
（『Festgabe für Eduard Berend』より）

kritische Ausgabe)』（以後『資料校訂版』と記す）編纂者として、ドイツ文学史にその名を残す。ともにユダヤ系の両親のもと、1883年ハノーファーに生まれた。父は弁護士で枢密院議員まで務めたらしい²⁾。

ジャン・パウル作品と出会った経緯はわからない。ジャン・パウルはドイツ南部フランケン地方の人なので、地理的・風土的関連からではない。のちに教授資格論文として、「ユーモア小説の歴史に寄せて」という題の論文を書いているところからして、少年時の読

書体験、特にジャン・パウル自身のそれと重なるような幸福な閉じこもり読書体験から来ているのではないかと推測する。大学入学までの人間形成をうかがわせる資料はいまのところ入手できない。ハノーファー工科大学に入学するも、一年も経たないうちに、本来やりたかったドイツ文学に鞍替えして、ミュンヘン及びベルリンで学ぶ（1902-07年）。「優等」（summa cum laudatio）をもらった博士論文のタイトルは、『ジャン・パウルの美学』（1907年。刊行は1909年）。指導教授は当時代表的ゲルマニストの一人だったミュンヘンのフランツ・ムンカー（1855-1926年）。普通のゲルマニストなら、このあと教授資格の取得へと向かうのだろうが、ベレントは在野の研究者・学者として、細々とティークやジャン・パウルに関わる出版物の編纂や雑誌の寄稿で暮らしていたらしい。その私生活について語られるこ

とはない。成果が出るのは1913年。ジャン・パウルに関するその同時代人の証言集として資料価値絶大の『ジャン・パウルのパーソナリティ。同時代の証言 (Jean Pauls Persönlichkeit. Zeitgenössische Berichte)』の出版である。博士論文からこの本の出版に至る間には、すでに前記『資料校訂版』出版の準備に携わっていたらしいが、第一次世界大戦の勃発によってこの計画は潰える。彼自身も志願して軍役につき、少尉とか中隊長とかいった階級にまでなり、鉄十字勲章1級と2級を得たという。どこでどのように戦ったのか、これまたわからない。さぞや堅実かつ慎重にして従順なる軍人さんだったのではなかったろうか。

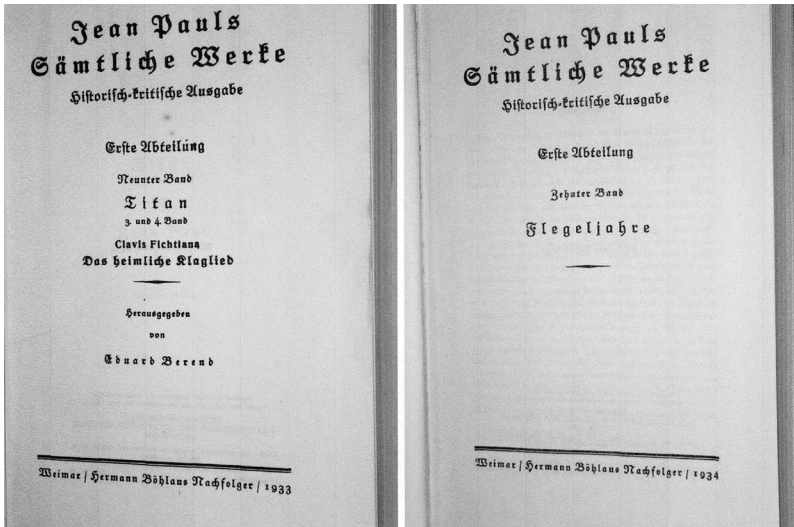
経歴上1914-18年の大戦間ずっと軍役についていたとなっているので、成人後の全生涯で、長期にわたってジャン・パウルと関わらなかった唯一の時期ということになるだろうか。どっちみち全集編纂どころではない時代なら、雑音のない世界は軍隊しかなかったのか。よくあるように愛国心に燃えて先を争って入隊するタイプの人とは到底思えない。ただ年譜を見ると、この時期も雑誌の寄稿や書評、本の編纂がいくつかなされてはいるのだが³⁾。

復員後ミュンヘンに戻ると、さしあたり一応教授資格を目指すも取得には至らない。大学人事特有の人間関係や学問方法における時代の好尚という点から見れば、前者はユダヤ人であること、後者は原典実証主義とでもいうような彼の方法論が、プラスに働くべくもない。かてて加えて、彼の生活のありようは、自己宣伝・ごり押し・ゴマすり皆無といったところらしい。しかし一方で、彼の関心がジャン・パウルのみに向けられているという事情も関係していたのではあるまいか。彼は、それ以外の、政治的・外交的行動や言動が必要とされるような立場には、身を置きたくなかったのではないだろうか。また教授として教える立場になることにも消極的だったのではないのだろうか。かれは生涯教壇に立つことはなかった。

ジャン・パウルの没後100年を記念して、1925年ジャン・パウルの第二の故郷バイロイトに「ジャン・パウル協会」^{ゲゼルシャフト}が結成される。同時にベーレント編集で「ジャン・パウル年鑑」^{ヤールブーフ}が一度だけ刊行されるが、翌年からは機関誌「ジャン・パウル・ブレッター」(「発行・ジャン・パウル協会」[責任編集・アウグスト・カーゼルマン]となっていて、ベーレントも度々寄稿している)に引き継がれる⁴⁾。この年を挟んで、ベーレントは「バイエルンアカデミー・デア・ヴィッセンシャフト学術協会」の後援を受けて4巻本の『ジャン・パウル書簡集』を、ミュンヘンのゲオルク・ミュラー書店から刊行する⁵⁾。つまり、ジャン・パウルに最も精通した学者としての地歩が、おそらく目立った自己宣伝もごり押しもゴマすりもなく、少しずつ築かれていくのである。その頂点が、1927年の「プロイセンアカデミー・デア・ヴィッセンシャフト学術協会」からの『資料校訂版』の編纂委託である。年2巻刊行で、1巻ごとに1500マルクの報酬が約束される(231)。1927年から1939年までは途切れることなく刊行が続く。

1933年ナチスが政権を取ると、「ジャン・パウル協会」においても、会長であるバイロイトの高等学校長アウグスト・カーゼルマン(1867年-?)がいち早くナチスに「同調」して、非アーリア系会員はすべて除名される。1923年にミュンヘンからベルリンに移っていたベーレントも犠牲となった一人で、ベーレントも一員であったベルリン支部は解散となる。カーゼルマンは、『資料校訂版』編纂作業からもベーレントを外すように要求するのだが、「プロイセン学術協会」のメンバーで、戦争前からベーレントとともにこの全集出版計画に関わっていたユーリウス・ペーターゼン(1878-1941年)がその要求を巧みに撥ねのけていたらしい(231-232)。それでもベーレントがどのように追い詰められていくかは、『資料校訂版』の扉と序言を見ればよくわかる。

『資料校訂版』は3部に分かれ、第1部はジャン・パウル生前に発表されたもの、第2部は遺稿と未発表のもの、第3部は書簡集である。刊行さ



ベーレントの名が外される前と後の『資料校訂版』の扉

れたものを整理すると、1945年以前はこうなる。(次の括弧内ははじめの数字が「部」、次の数字がその「巻」。例えば第2部第3巻は、2-3と記す。)

1927年(1-1, 1-2)

1928年(1-6, 2-1)

1929年(1-3, 1-4)

1930年(1-5)

1931年(1-7, 2-2)

1932年(2-3)

1933年(1-8, 1-9)

1934年(1-10, 2-4)

1935年(1-11, 1-13)

1936年(2-5)

1937年(1-12, 1-15)

1938年(1-16)

1939年(1-14)

1942年(1-17)

1944年(1-19)

1945年以後は、刊行再開は 1952年の3-6からで、1954、55、56、58、59、60、61年にそれぞれ3-7、3-8、3-1、3-2、3-3、3-4、3-5が順調に発行されていて、さらに1963年に1-18、1964年に3-9が出て、その後も刊行は続くが、ベーレントが関わるのは1964年までである。

問題は1934年から1944年までに刊行された巻である。1934年刊行の分から、これまで扉に記されていた「ベーレント編」の文字がなくなり、かわりに序言の最後にその執筆者名という感じでベーレントの名が記されている。それまでは序言には名前の記載がなく、当然編者がそれを書いているということが前提だったようである。この体裁は1938年まで続く。1939年の1-14は「ジャン・パウル協会」ベルリン支部員でジャーナリストのヴィルヘルム・フォン・シュラム（1898-1983年）が序言の執筆者となっているが、編集作業はベーレントが行ったようだ（24）。1942年の1-17の序言はクルト・シュライネルト（1901-1967）。このときベーレントはすでにスイスに逃れているので、関わることはできなかった。1944年の1-19は、ナチス党員であるのみならず党地区拠点長であったものの、かつて1-2のみ編纂者となっていて、ベーレントがそのたゆまざる協力で後年感謝している⁶⁾シュライネルトとは異なり、1940年8月にベーレントの後任となった「筋金入りのナチ」フランツ・コッホ（1888-1969年）が、「全く未経験の弟子」パウル・シュタッフ（1912-82年⁷⁾）に丸投げしたもので、2巻の予定だった「異稿・草稿編」の1巻目が出てしまったもの。予定されていた2巻目は、戦争で刊行が遅れたおかげで、出版を阻止することができた（186）。

1938年11月のポグロム（水晶の夜）のあと、「保護」の名目でザクセンハウゼン収容所に入れられ、釈放の条件としてドイツ出国を約束させられたベーレントは、1939年、アメリカ合衆国（以後アメリカと記す）在住の旧知のゲルマニストの尽力で、アメリカ入国のための「^{アフィダヴィット}身許引受保証書」を手に入れることができ、そのおかげで3年のうちに出国することを条件に、スイス入国が認められ、一時的に住むつもりであったのだが、結局1957年までそのままスイスに住むことになってしまう。この年ベーレントは、マルバッハのシラー・ミュージアムのジャン・パウル資料室の管理を委ねられるとともに帰国し、『資料校訂版』の編纂にたずさわり続け、1973年死去。姉アンナ（1879-1943年）はベルリンでベーレントと同居していたようだが、出国できずアウシュヴィッツで、同じくハンブルクに住んでいた兄フランツ（1881-1942年）も同様にクルム（現ポーランド・ヘウムノ）で命を絶たれる。音楽家だった弟のフリッツ（1889-1955年）はロンドンに出国でき、戦後ドイツで再会できたものの、生涯独身だった兄エドゥアルトをただ一人残して早くに亡くなる。

(2) 誇り高き研究者

ゲルマニストとしてははじめて聞く名だった。ありふれた名だが昨年（2013年）、エドゥアルト・ベーレントとの1938年から1972年に至る100通の往復書簡が一冊の本に纏められて出版された。文通のきっかけは、ドイツ出国の必要に迫られたベーレントが、及ぶ限りのアメリカ在住の旧知の人々に助力を求めたとき、最も具体的かつ現実的に反応してくれたことによる。

しかしこのハインリヒ・マイアー（Heinrich Meyer）（1904-1977年）はベーレントとはすべてにおいて全く正反対の人物なのである。1904年ニュルンベルク生まれ。父は小学校教師。エアランゲン・ミュンヘン・フライ

ブルクではじめからドイツ文学を専攻する傍ら、さらに英文学・歴史・美術史・現代ジャーナリズムを学ぶ。「すでにギムナジウム(1)のとき、全ジャン・パウルと全ヘーゲル […] 等々を取り込んでいて、カードボックスを作り始めたが、その後二度と見ることはなかった」⁸⁾と、ベーレント75歳記念論文集に、一人だけベーレントへの書簡という形で論を展開してそのように記す博識家である。ただしそれ以上に自信家であるようだ。

第一次世界大戦後のドイツに、この成人前の若者は、大人として零年をはじめて体験したロストジェネレーション世代と違って、自分の力次第で何でもやれそうな開かれた未来を見ていたのではなかろうか。研究職よりも外国でドイツ語を教えることを選ぶというマイアーのような生き方は、どこか冒険的に見える。アメリカの大学で教えるには2年間の教師体験が必要なのだと知らされると、諦めることなくその2年間を、こともあろうに「世紀末の生活改善運動」の流れを汲む、教育改革家マルティーン・ルーゼルケ(1880-1968年)が北海のユースト島に創設した「シュレ・アム・メーア海の学校」で過ごす(234)。この学校の選択そのものにすでにある種の冒険的意志が感じられるが、きっかり2年、1928年から30年まで勤める⁹⁾。それからアメリカへ赴き、ドイツ語教師として1912年創立のテキサス州ヒューストンのライス大学に奉職する。1935年にアメリカ市民権を取得。

1938年、学生の頃に面識があり、多少コンタクトを取り続けていたらしいベーレントから、突然履歴書と著作リスト同封の手紙が届き、アメリカへの移住についての相談を持ちかけられる。ただちに手配やアドヴァイスを行うとともに、身許引受保証書を送って、彼のスイスへの出国が可能となるようにしてやる。

第二次世界大戦中の1942年、かねての親ナチス・反アメリカ的言動のせいか、アメリカへの忠誠義務違反ということで訴えられ、翌年市民権を剥奪され、ライス大学を首になるとともに、「敵性外国人」として、1943年

3月はじめから6月末までの間テキサスの「ケネディ^{エイリアン・ディテンション・キャンプ}外国人抑留収容所」に入れられる。しかし自ら異議申し立てを行い、移民にも言論の自由があるという反論が認められ、市民権回復となる。この事件を契機に教職の道はあきらめて、ペンシルベニアのエメウス (Emmaus) で農業とオーガニック・ガーデンの雑誌の編集に携わるようになるが、1947年から再びペンシルベニア州エリントン (Allentown) のミューレンバーグ・カレッジで教職に就く。1963年以降はテキサス州ナッシュヴィルのヴァンダービルト大学に勤め、1972年定年を迎える。1977年死去。文学者として文筆家として活発な活動を行った。三度結婚、はじめの二人はアメリカ人、最後は同郷のドイツ人。1954年2月、二番目の夫人とともに、某財団の援助でヨーロッパ研修旅行に赴いた際、一度だけベーレントとほぼ30年ぶりに会っている。

(3) 遠慮と期待

「あなたの最後の詳細にして心に沁みたお手紙—1934年6月6日の—は、4年以上の間、私の書斎机の上に置かれたままでした。『未返事の書簡』という不吉なファイルの中ですが—残念ながら人生とはそんなものであります」。1938年12月17日、ベーレントは、自分の命がかかっているナチスドイツからの出国のための協力要請の手紙を、こんな何気ない、いやむしろ返事をしていなかった失礼を詫げるわけでもなさそうな書き方で始める。そのあとすぐに、相手が書いた小説¹⁰⁾の書評が手に入ったので同封すると書き、その小説は今注文しているので読むのが楽しみだと話を持っていき、それは「今とっても息抜きを必要としているからだ」と続ける。

しかしそのあと思いついたように、相手が懸賞論文に応募したことを知らせてきていたことに触れ、その後どうなったか尋ねる。「それについて何か書かれたものを読んだ覚えがないので」と、言わずもがなと思える一

語が入る。さらに「1936年にドイツへ来られる計画でしたよね……」と、点線でお茶を濁す文章が続く。

そのあとやっつである。なぜ「息抜きを必要としている」のかが語られるのは。必要としているのは息抜きどころか、急を要する救いの手なのに。ベーレントはこう話を持ち出す。「ところで、あいにく私は、私自身の身の上のことであなたを悩ませなければなりません。これが良くない状態なのです」。すでに20巻出ていて、21巻も近く出る、「30年来取り組んでいる私のライフワーク」を完成することが許されなくなっている。「プロイセン学術協会」が人種法に則って契約を破棄したからだ、と話は続く(9)。「あなたはご存知でしょうが、このところ当地の状況がととも緊迫化していて、55年間暮らしてきたというのに、移住という苦い決断をものは避けられなくなってしまいました。」「私の視線が、困難があるということとはわかっていても、どうしてもまず第一にアメリカへ向かってしまうことはおわかりいただけるでありましょう。」ここでやっつと本題となる。「あいにく私にはそちらに親類縁者がおりません。ですから差し当り、私と私の作品に関心を持っておられると思われる何人かの方々にお手紙を書かざるをえない次第となってしまいました。この方々の中におそらくあなたも入れて差し支えないと思うのです。」しかも続けて括弧つき文章で、同時にこの人にも手紙を書くのだと、やはりアメリカ在住のゲルマニストの名を出している。同学の先輩からよく知らない後輩へ頼みごとをするときの距離の取り方の難しさが滲み出ているが、それにしても自分の命がかかっていることの自覚はないのだろうか。それとも単刀直入に持ち出すのは憚られる距離を律儀に保っているのだろうか。「もし助言とか行為で私を何らかの形で助けてくださるお力がおありでしたら、私のこの願いと希望と期待が無駄なものとならないようにしてください。善は^{ベリークルム・イン・モラ}急げの状態なのです。」それにしても、相手によってはじわじわと抜き差しならぬ関与

へと引きずり込まれてしまいかねない不思議な表現と思われるが、こういう持って行き方は、一つにはバーレントの方に比較的具体的に目指すところがあるからだということが、次の文章でわかる。「求めるもの」は「考えられる限り最もささやかなもの」で、「最小限度の生存」ができればいいのであるけれど、「学問的に自分の力を発揮できれば、それが一番」なので、中断させられた『資料校訂版』の書簡集の続きを、資料は手許にあるので、そちらで続けられるように、出版社なり学術組織なりが見つからないものかと話を持ち出すのである。もちろん「生きていくためには」他の何でもやる覚悟はある、戦争を生き延びてきたのだから、と続けることを忘れない。英語も多少はできるし、「足りない部分」は、今から補える。「履歴書と著作リスト」を同封するのでよろしく頼む。最後に返信を求めるとともに（「はがきですぐに」、とあり、「すぐに」にアンダーラインが引かれている）、彼の本が手に入ってそれを読むことを、「精神的対話」と称したあとで、「いつか物理的にもそれ（対話）が可能となるでしょうか」（10）と尋ねて手紙を終えるところを見ると、要するに彼の希望は、アメリカに移住したいということに尽きる。最後の追伸のそのまた最後の、「どんな藁でもすがる思いでいます」（11）ということばこそが、一番言いたかったことなのだろうが、相手は必ずしも彼の置かれている状況の理解には至っていないらしいことが、この先の文通で明らかになっていく。

手紙を受け取ったマイアーは、受取の知らせを航空便のはがきで伝えると同時に、詳しい返事の手紙は船便で送る。つまり切迫性をあまり感じなかったということだろう。アメリカへの移住に関して、落ち着き先がないか当たってみると言い、もし見つからなくても自分のところへ来ればいいと言ってはくれるものの、彼の方には自分のフリードリヒ・ハインリヒ・ヤコービ書簡集刊行の目論見にバーレントの助力が得られるかもしれないという期待があって、いわばギブ・アンド・テイク的なエゴが透けて見えた

りもする。しかしマイアーの最初の手紙の特徴は、そこに彼の人間性が明瞭な形で表れている点だろう。ベーレントの問いかけにあった懸賞論文は受賞できなかったと告げる一方で、その受賞者を思いっきりけなす。名前を出すのも汚らわしいといった感じで、「ハンプルクのドクター某」と呼び、「学術協会」のシュプランガー¹¹⁾は自分のことを「褒めちぎった」のに、賞はそいつに行ってしまう、その後そいつの書くものといったら、「かったるい」もので、ただこれまでの路線を踏襲するのみで、自分のように「探求をして何千倍も新しいものをもたらしている」ものとは違うのであり、そんなものが主流だから、自分は小説でも書いてみたのだ、と思いきり自分のことを語る(14)。その他にも彼が名を持ち出すゲルマニストは必ずといっていいほどけなされている。さらに彼はさりげなく、第1級鉄十字勲章が自分には他の人より物をいうと言い、ナショナリストであることを強調することもぬからない(13)。

この二人、ユダヤ人のアメリカ移住希望者とアメリカで不満たらたらのドイツ語教師生活を送る愛国的ゲルマニストとの間の往復書簡とは、つまりは、その関係がどう纏れ交錯し、その距離がどう変化していくのかの記録だとも言えるかもしれない。単にジャン・パウル研究第一人者である一人の老ユダヤ人学者の、命を懸けた流転の物語ではないのである。

マイアーの返事を受け取ったベーレントは、「12月に収容所から釈放された後世界中に送ったたくさんの手紙の中で、私にはあなたののが最も期待できそうに秘かに思えた」と言ったあと、何故「秘かに」かを説明する。つまり自分は、「期待したり恐れたりすることは、いつも違った風になっていくのだ」という「揺るぎない迷信」を抱えているので、「この手紙からはほとんど、あるいは何も期待できないのだ、と自分に言い聞かせようとした」のだが、それが違って、「あなたの手紙は私をいとも深く感動させてくれ、最近他の局面において出くわした多くの苦々しいことを忘

れさせてくれた」からだ。この回りくどい言い方を讀んだマイアーはどう思っただろう。期待すると裏切られるのが常だから、期待しないように気構えをしていたら、思いがけずいい知らせだった、というわけだ。言わずもがなのことではないか。もっとも自分の努力がそう簡単に報われるとも思えないという思いはあったのかもしれない。ベーレントは自分の業績に限られたものであることは知っているし、アカデミズムの渦中に身を置いたこともないのだから。だからすぐあとに、「あなたの努力が功を奏しなくても」「永遠に感謝」と言っている。しかし、極度に慎重で、相手が積極的になると引いてしまうというところがベーレントにはあるようで、マイアーが自分のところに来てもいいと言ってくれたことに対しては、移民の割当クヴォーテ(クオータ)てがあるから無理、すぐには順番が回って来ないだろうと言うのだが、一方で割当て制度を突破する手立ては、資本家である以外になく、自分も資産は結構あるけれど、持ち出し額は一部しか許されないだろうから、結局手立てとして考えられるのは、差し当り大学講師として招聘されることであるが、ドイツでその経験がない以上、これは難しいだろうが、図書館員ならミュンヘンの公立図書館に勤めた経験があるので何とかやれるかもしれぬと、これまた回りくどいのだが、要は大学講師とか大学の図書館員として招聘してくれると助かるという希望をしっかりと持ち出しているのである(17-18)。ただその場合、ジャン・パウルの研究のキャリアが認められることが前提だと思われるが、ひょっとしたらベーレントは、書簡集の資料が手許にあるという事実を一つの強みとするとともに、アメリカのゲルマニストたちにも自分のことが多少は認められているのではないかという思いもあったのかもしれない。もちろんそれは全くあり得ないことで、その点ではアメリカは、1936年にすでにジャン・パウルのモノグラフ¹²⁾が書かれている日本よりも遅れていたのかもしれない。

一方同じ書簡の中で、前にマイアーが持ち出していたヤコービの書簡集

については、ヤコービは自分は「必ずしも好きではない」と率直に協力を断っている(18)。手に入ったマイアーの小説についても、まだ半分読んだだけだが、物語も描写も素晴らしく、主人公にも作者にも共感を覚える。だが「幾人かの脇役のキャラクターは完全に納得できないでいる」と正直だ(19)。

(4) 叱責と助言

「あなたの願望を力の限りあと押ししてみました、これまで得られた返事は一つだけでした。おそらくこれだけでしょう」(20)。翌1939年1月17日のマイアーの返事の書き出しは些か投げやりにも聞こえる。あるいは実際に当たってみて厳しい現実を悟らされたのかもしれない。ベーレントの「願望」が限定されてくれば、その「願望」が向かう先も当然限定されてくるわけだから、マイアーが八方塞がりとなっても無理はない。

続くマイアーの1月30日の書簡では、「ユダヤ人問題」というものに今改めて直面したかのように、ユダヤ人ベーレントという存在が彼の視野に大きく立ちはだかってきたかのようなのである。アメリカも「ますますユダヤ人には敏感に(Jew conscious)なりつつあり」、「遅かれ早かれこもヨーロッパと異ならなくなるだろう」から、「たとえ可能でも、アメリカへ来ることはやめるように言わざるをえないとすら思っている」という考えを述べるのだ。最後は「ヒトラーが^{コレクティブ}一括的解決をうまく見つけられることを期待しててくださいという空疎なことば以外私には残らない」という言葉で結ばれる。もちろんここで彼が言う「一括的解決」は、ユダヤ人虐殺のことではなく、「ユダヤ人は自分の国を持つべきだ」という意味だ(21)。

この期に及んではベーレントも作戦を変えざるをえない。それは、とりあえずスイスへ出国するという方法である。ただし、スイス入国の許可を

得るには、そこから第三国へ出国する予定があるということを示すために、その第三国の身許引受保証書が必要なので、それを送ってくれないか、という懇願となる。同年3月マイアーからそれが送られてくる。マイアーはそれが思いがけず簡単に取れたことに気をよくして、また自分のところへ来てもいいと言ったりもする(25)。もっとも前の手紙でベーレントが、彼の小説を終わりまで読んで評価している旨伝え、主人公と同じ境遇の外地のドイツ文学に通じた友人に読ませたらやはり褒めていたと伝えたことに気をよくしたこともあるのかもしれない(23)。

3月のマイアーの身許引受保証書同封の手紙が着くより前に出した手紙で、ベーレントがマイアーの1月30日の手紙に珍しく強く反応する。ドイツでユダヤ人がどういう状態にいるか、手紙の検閲を恐れてだろうが、具体的に書くことができないらしい中で、「当該規定の実行の容赦なさ」をあなたはわかっていないと言い、出国しか道はないのだと強調する(26)。マイアーがヒトラーのことばを真に受けていたり、ナチス高官と折衝してみるとか言ったりすることに(20-21)、苛立ちを禁じえないかのようだ。最後に「今度お手紙をいただけるときは、政治向きのことは一切避けてください。あなたには差支えなくても、私には差支えがあるのです」。そして、「あなたのお述べになることがどんなに興味深いことであっても——あなたはそれによって、全く不本意な形で、私の身にこの上ない不快事をもたらしかねないのです」(26)。

しかしマイアーはやめない。4月12日の書簡ではこうだ。「こちらはますます反ユダヤ的になりつつあります。遅かれ早かれここは全くドイツと同じようになります。」「私は警告しておきます。どこもあなたのような存在にとって楽なところはないでしょう。」「あなたは問題とされません。」「もしあなたが簿記とか化学とかをやっている、その上2、30歳若かったら、違っているでしょうが。」「あなたが報告されている当該規定の容赦な

い実行は当たっていないとは思いますが、ほんとうは我慢すべきことなので
す。つまりそちらではあなたは生きておられますが、こちらでは、もし仕
事をしながら何とかやっけていくおつもりなら、餓死されることでしょう」
(28)。つまり「こちらにはドイツの一番ひどかったときよりもっとたくさ
んの失業者がいる」(29)というわけだ。立て続けのショック療法であ
る。わずか4か月ほどの間のこの変化。しかし彼は続けて自分自身の不満
をぶちまける。大学語学教師としての生活のやりがいのなさ、ゲルマニス
トとしては認めてもらえないという、才能への不当な評価。アメリカ人の
妻との間もうまく行かなくなっていたのだらう。この頃彼はどうも妻の収
入を当てにしてドイツ旅行の計画を立てていたようなのだが、その妻の収
入源である親の石油会社が倒産か何かしたらしく、旅費の工面がつかなく
なったこともそれに関係しているようで、1942年に離婚している。

ベーレントはマイアーの厳しいことばを受けて、大変だとわかっけて
も出国するしかないのだと改めて伝える。差し当ってマイアーに送っても
らった身許引受保証書のコピーをスイスに提出して入国許可を待つつもり
のベーレントだが、一方でこうあれこれと思案する。スイスの当局からア
メリカ入国までどのくらい時間がかかるのか問い合わせがあったので、事
情に通じたアメリカ人弁護士に尋ねると、彼の入国願いの受付番号から見
て3、4年かかるだろうと言われた。そうなるらとひょっとしたら、スイス
入国許可は下りないかもしれない。あるいはスイス入国許可が下りる頃
には保証書の期限が切れているかもしれない。また友人の保証書の場合、親
族のものよりも保証人の収入がずっと多いことが求められるので、マイ
アーだけでは足りないかもしれないから、そのときはかねて名が出ていた
マイアーの友人の金持ち実業家の援助を請わなければならないかもしれ
ない。それにマイアーがドイツへ帰国する可能性もなきにしもあらずなのだ
(32)。

しかしマイアーの方は、自分のなすべきことは行ったという感じで、ベーレントはただスイス入国許可を待っているだけなのだと受け取っているような内容の手紙となる。つまり、自分の身の上のことや考えていることを、親しい友人に話すかのような文面となる。もっといい大学へ移れるかもしれないこと、今度は英語で小説を書こうと思っていること、その本は売れると思うのでお金ができれば、農場を買って独立して自分の学校をつくるつもりだということ。そして、アメリカのユダヤ人情報といった感じで、ユダヤ人が船旅の仲間にいると言って苦情が出たこととか、あるボーイズ・キャンプはユダヤ人を入会させないのだとか、ユダヤ人を断るホテルが多いとか、大邸宅のある郊外地区は大抵ユダヤ人を住まわせないのだとか、「こちらは1933年以前のドイツよりも遥かにひどい」状態にあると言い、だからアメリカに来るよりもスイスにいる方が安全だろうと助言する(45-46)。以前のようにベーレントの現状認識の甘さへの苛立ちがなくなっているのは、ベーレントがひとまずスイスへ入国する計画でいるので、自分の方にも時間的・精神的余裕ができたということがあるのかもしれない。

(5) 楽観と悲観

1939年9月1日の第二次世界大戦突入は、スイス入国に悲観的だったベーレントにとって、むしろ救いとなる。たしかにスイスは、戦争勃発とともに、提出済みの入国申請を反古にした。しかし国境を完全に閉鎖してしまっただけではなく、ベーレントの場合新たに入国申請を行い、バーゼル大学のアルベール・ベガン(1901-1957年)をはじめとするスイスの教授たちの尽力で、差し当たり3年の期限で入国を許可され、同年12月21日スイスに入国し、最終的に同月31日ジュネーヴのベルリン時代の友人夫妻の部屋の一室に落ち着く(50, 241)。1年ほどして、おそらく運び出せたたく

さんの蔵書の置き場所のことから、間借り生活に区切りをつけて近くに部屋を借りて移る¹³⁾。結果的にジュネーヴ時代が1957年3月31日まで続くことになる。

半年ごとの更新で3年と期間を限定されていたらしいが、1940年12月の書簡で、「滞在許可証」が「寛容許可証」に書き換えられ、「滞在目的」の欄に、これまでは「文学研究」のみだったが、さらに「と移住準備」と書き加えられたとある(93)。つまり教授たちの尽力で「文学研究」のための滞在として取りあえず入国できたのだろうが、ほんとうは「移住準備」のための「寛容」的な許可だったのだろう。生活費は当初はスイス在住の親類縁者の援助があり、この一家は1940年末にニューヨーク経由でカナダへ移住する際にも、向こう2年間は暮らせる金を残していったくれたという(94, 195)。

当初の二人の立場を整理すると、ペーレントには、スイスに3年しか滞在できず、そのあとはアメリカへ赴かなければならないということがまず念頭にある。マイアーは、そのペーレントを早く迎える方法は、アメリカでも通用するような業績を作ることだと思い、手っ取り早いのはジャン・パウルの伝記を書くことだと考えて、それを彼に勧める。ところがペーレントの方は、努力してみるとは言うもののあまり乗り気ではないということが、はっきり読み取れる。伝記のように著者として「プリマドンナ」のようにしてまとめたものよりも、書簡集のように直接的資料そのものを編纂するいわば裏方的作業の方が自分には向いているというのだ(74-77)。結局マイアーはそのことは言わなくなり、一番いいのは図書館勤めではないかと思い、その方面の伝手を探してやろうとするように見える(80-81)。ところがペーレントの方は、大戦勃発のおかげでスイスに無事入国できると、ほっと一息つけた感じである。「ここはかなり快適で、ドイツの姉と兄のことを心配しなくてよければ、完璧な幸福状態でしょう」

(60)。間借り先の学者が発行している雑誌の購読者を募ってくれないかとか、今取り掛かっている論文のこととか、アメリカで出ている文学雑誌に寄稿を勧められ、そのためには会員にならないといけないので入会手続きをして会費を立て替えておいてくれないかとか、彼の文面には一時の切迫性があまり感じられなくなる(62, 87)。アメリカに移住したときのために英語にも慣れようとしているので、今度は英文で書いてくれないかとベーレントが頼み、マイアーがそれを受けて長文の英語の手紙を書き、二度ほど英文でのやり取りが行われる際も、マイアーの「添削」の細かさと若干の押し付けがましさに、ベーレントが弱音を吐くという構図で終わる。マイアーの方こそ英語よりドイツ語の方がよかったに違いない。当初はたくさん蔵書と資料を彼のもとへ送っていいかと打診していたベーレントが、スイスへそれらを運び出すことができたので、当面はそちらに送らずに済むと書いてあれば、スイスで多少なりとも研究・執筆が行える環境ができたのだという感触が伝わってくるだろうし、マイアー自身、すでにアメリカへは来ない方がいいと繰り返し言うようになってもいるので、二人のつながりには以前ほどの緊張感がなくなってきていることは、両者ともに感じていたかもしれない。ベーレントの資質としての樂觀主義及びそのつかえ棒みたいな用意周到さと、マイアーの資質としての悲觀主義及びその奥にある生真面目さ、この二つが危うい所でバランスを取り合っているかのようである。

それにしても、むしろマイアーの方に危機感が感じられるのは皮肉である。祖国ドイツと市民権を得たアメリカとの戦争の危惧、アメリカの反ドイツ・反ユダヤの社会状況は、彼にとっては、自己の生活と、場合によっては命にも関わりかねない事柄だったのだろう。アメリカは参戦しないと言っているのは、多分にそうあってほしいという希望的観測に見えるし、自身のヒトラー最愚を隠すこともしなくなる。「アメリカ人は根本的に嘘

つきで無定見で、大衆という動物で、ヒステリー」であるが、「ヒトラーは、世界の理性のために働く浄化力であり、有益な雷雨であり、そのあとにはよりよく組織されたヨーロッパのためのより明るい日が始まるのだ」と書く(83-84)。ユダヤ人に対しても、「ヒトラーは何か考え出していると確信している」とも言うのだが、もちろんこれも強制収容所のことではなく、やはりユダヤ人国家が作られて、ユダヤ人はみんなそこに行けばいいという意味で言っている。そうなれば、「アメリカには全く新しい法規範が現れる」(85) ことになり、今のようにユダヤ人に国が引っ掻き回されることはなくなるだろうというわけだ。こういう反米的で、意識なき反ユダヤの彼だから、何度となくドイツへ帰りたいとも言うのだが、おそらくドイツで受け入れてくれるような教育研究機関は見つからなかったのだろう。彼にはドイツのゲルマニストたちの中でアピールできるような種類の業績はないようであるし、コネもなかったのだろう。

アメリカの対独宣戦布告は1941年12月11日だが、マイアーからベレントへの手紙は1940年11月5日のものをもって途切れる。その際マイアーは12ドルの小切手を同封している。これが最後になるかもしれぬという気持ちもあったのだろうか。最後のことばが、「私はずっと落ち込んでいます」(92) だった。その後大戦終結まではベレントの側からの4通のみ。そのうち最後から二番目のものは、主に送ってくれた論文へのお礼と住所変更の通知のはがきで、最後のものはそれから5か月後、連絡をよこさないマイアーを慮って、というより慮っていることを表すためにか、あるいはマイアーが読めない状況にあれば、近親者が読むこともあることを想定してか、英文で書かれている。そこには、戦争によって、アメリカへの入国は、「近親者がドイツにいる」以上許可されないだろうということ、兄がポーランドへ「撤退」させられたこと、姉が工場で一日10時間働かされていること等が書かれている一方で、ジャン・パウルの「書簡集」の編集が

ほとんど終わったこと、『ジャン・パウルとスイス』（1943年刊）という作品として出版されることになる論考がほとんど出来上がったことが報告され、前述の会費の再度の立て替え依頼で終わる（97-98）。

(6) 距離と接近

マイアーから音沙汰がなかった時期は、戦争中ということもあるが、むしろ前述の市民権に関わる告訴に端を発する収容所生活、控訴裁判、解雇と新しい仕事及び生活の開始という彼自身の身の辺のただならぬ状況と関係していたと考える方が自然だろう。戦争が終わるとベーレントは人づてにそういった彼の事情を聞いておそらくすぐ、1946年5月19日付けの手紙を書く。彼の身の上に同情を寄せ、命の恩人への恩返しをしたいと言う。「あなたの身許引受保証書がなかったら、私はスイスへ来てはいなかったでしょうし、もしドイツにいたら、かわいそうな姉や兄と同じように、きっと命をなくしていたことでしょう。彼らは東へ送られ、もし事前に自ら決着をつけていなければ¹⁴⁾、十中八九ガス室に送られております。（弟の方はロンドンで生存していて、近々私を訪問すると言っています）。」金銭的な援助はできないが、自分の「取るに足りない影響力の及ぶ限り助言なり行動なりで」援助できるかもしれないと言う。ここでベーレントは、『資料校訂版』の続きをやりたいがまだ「学術協会」はそこまで行っていないという一方で、パイロイトの「ジャン・パウル協会」が、当時あつという間にナチスに「同調」して自分を切り捨てたのに、今度は会長が「卑屈で哀れな手紙をよこした」けれども、「ほとんどこれに関わる気はしない」のだと書く。もうアメリカ行きは考えていないとはっきりと書く。スイスに留まることができるようになるだろうと言うが、まだ明確な計画は立っていない。それでもとにかく仕事に関しては、「大した心配はしていない」のであり、「私のライフワークの完成のためにはどんな犠牲も厭わないで

しょう」(98-99) というわけだ。慎重な楽観主義の全開である。

これに対してマイアーの方は、翌月14日付けの返信を読むと、また当初の自信家に戻っている。「USA 対マイアー裁判は画期的なもの」で、おかげで「市民はこれからは、当地で生まれていようがいまいが身の安全を保障される」ようになったと言うとともに彼が強調するのは、それが孤立無援と言っていいような戦いだったことである。大学を首になった彼に仕事を世話してくれるような同僚はなく、せいぜい本を買ってくれることで資金的援助をしてただけだったというときは、彼らはそうやって「超稀観本」を手に入れることができたのだ、と一言加えざるをえない。農場を買ってオーガニック・ガーデニング関係の雑誌の編集に携わっていることや再婚したことを伝える文章は、新規まき直しの前向き人生をうかがわせる内容で、いまや収容所すら「素敵な最高の社会」だったと言う。些か躁状態ではないかとすら思えてくる(100-101)。

ベーレントは1947年1月12日付けの書簡で、ベルリンの「学術協会」から正式に『資料校訂版』の編集主幹の就任要請があり、それを承諾したと伝えているが、一方でドイツへ帰るかどうかはまで決めていないと言う。ナチスの迫害を生き延びたユダヤ人は、多くの場合ドイツへの帰国を即座には決められないのが常であるようなのだが、ベーレントの書簡からうかがえるのは、忌々しいぞっとするような体験が念頭にあるの心理的情緒的逡巡というよりは、おのれのライフワークで生活していける状況にあるかどうかという生活レベルのそれであるように見える。あるいは、マイアーに向かって持ち出すことが憚られたのだろうか。自分の情緒面をさらけ出すと、自分には太刀打ちできないマイアーの饒舌を引き出して收拾がつかなくなってしまうことを恐れたのだろうか。ここでもベーレントは過剰に反応しない静かな人といった印象だ。

『資料校訂版』のために重要な「学術協会」もベルリン国立図書館もソ

連占領地区にあるので事務手続きが面倒になっていると言う。手紙で問い合わせても返事がないので、バルンのソ連大使館まで出向いて直に尋ねたら、ロシア語での申請書類の提出を求められ、しかも結果は、モスクワへ送られて審査されてはじめてわかるのだと聞かされる。英・米・仏のオフィスで尋ねても、「学術協会」はソ連地区にあるので入国ビザは出せないと言われる(116)。しかし実は国立図書館所蔵のジャン・パウルの手稿は、この時点では、モスクワに移送されてしまっており、それが旧東独へ返還されるのは1957年のことであり(204, 149, 214)、まさにこの年にベーレントはドイツへ帰国する。ベーレントが取り掛かっていた『資料校訂版』全集第3部の書簡集の方は、4巻までがこの全集とは別の形ですでに出ていて、その続きという形になるわけだが、書簡集の続巻のための原稿と資料はスイスへ持ち出していたため、続巻となる部分、つまり第5巻はすでに出版可能となっていたのだが、1948年に印刷に回すため出版業者に預けていたところ、その車ごと盗まれてしまい、コピーを取っていなかったため復元に手間がかかることになって、これは後回しになり、そのあとの部分である第6巻が先になり、これが1952年に出版され、戦後最初の巻となる¹⁵⁾。つまりこのときまではずっとジュネーヴで書簡集の編集作業に携わっていたことになる。こういうことをベーレントはマイアーには、いかにも彼らしく淡々と単なる事実として伝えるのだが、それは一つには、マイアーの文章からは明らかにその仕事と生活の感乱ぶりが読み取れるからだろうか。

1947年3月17日付けの書簡から1951年5月6日付けの書簡の間、マイアーからは音沙汰がなく、ベーレントもその間は手紙を書いていない。ベーレントが「ジャン・パウル協会」の機関誌「ヘスペルス」を送ったことが再開のきっかけのようだ。当初送られていたマイアーが編集者を務めていたと言われるオーガニック・ガーデニングの雑誌も送られなくなって

いたらしいから、ベーレントとしては返事は期待していなかったのかもしれない。久しぶりに手紙を受け取ったベーレントがマイアーに、その後どうしていたのかと尋ねる1951年5月13日付けの手紙に対しての5月27日付けの手紙の中で、マイアーは、また教師の仕事に戻ったと伝える。その間にマイアーは『ゲーテ。作品の中の人生』（1949年）という作品を出版しているのだが、ベーレントには送らずにいて、文通再開後改めて送っている。ベーレントの方向性とは全く異なっていると思つてのことだろう。そもそもベーレントはほとんどマイアーの方向性に対しては申し訳程度の興味しか示さないようだし、マイアーの方は、ベーレントの人生はジャン・パウル作品の実証的研究にのみ捧げられているのだということがすでに了解・認知済みであり、自分のやっていることには興味がないだろうということが十分にわかっているようだ。そこで時に皮肉や自嘲が混じることになる。

当初ヤコービの書簡集を出したいと言っていたように、マイアーは自身ジャン・パウルの同時代のもっとマイナーな作家たちの作品や当時の書簡に興味を持って、それらを集めたり読んだりしていたようだが、そこにジャン・パウルの名が出てきたらベーレントに教えてあげようと思つてはいたらしい。のちに彼が見つけたジャン・パウルの書簡をベーレントに教示して、こちらがそれを書簡集に採用している(87)¹⁶⁾。ベーレントの方もこれは期待していたようだ。二人の最大の利害の一致点は、まさにそこに落ち着くのかかもしれない。1964年のことである。

再開後もマイアーは身辺多事であるようだ。例によって、個人への悪口雑言も社会への不満もふんだんに出てくる。文脈がわかりづらくなったり、勝手にドイツ語を英語風にしてみたりといった文章の暴走ぶりもある。二度目の離婚も体験する。オーガニック・ガーデニング雑誌及びその発行元との確執そのものは語られていないが、オーナーのユダヤ系アメリ

カ人ロンデール一族の景気の良さへの反感のことばからは、彼のユダヤ嫌いは変わっていないことも見て取れる。しかしマイアーは、「伝記」を書いたらいいと強く主張していた以前の態度は完全に捨てて、ベーレントに少しずつ近づこうとしている。例えば、「ジャン・パウルの協会」に入会する（1951年）。ベーレント編纂の『ジャン・パウルのパーソナリティ』再版の書評を行う（1956年¹⁷⁾。ベーレント75歳の記念論文集¹⁸⁾に寄稿する（1959年）。果ては大学でジャン・パウルをテーマとしたゼミを開く（1965年）。マイアーには、ジャン・パウルの作品の面白さよりも、ジャン・パウルという作家そのものへの関心と、ベーレントの「ジャン・パウルは全く知らない集中力」（165）で行われた仕事とその人物像への興味の方が勝っていたのではないかとと思われる。

1954年2月17-18日にマイアーはジュネーヴのベーレントを訪問する。どういう出会だったか詳細は手紙からはわからない。ただかつて話題にしたことのある書店に一緒に行ったという事実が明らかになっているのみである（209）。会ってからのちの最初の手紙は同年7月22日のマイアーからのものであり、「親切にしてくれたことややさしく接してくれたこと」にまだ感謝していなかったことを詫びている（135）。ただし以後も文面のトーンはお互いにこれまでと変わらないように見える。おそらく会ったときも、文通のときの距離感は保たれ続けたのではなからうか。

(7) 出会いと別れ

1957年のマイアーの二度目のドイツ訪問は、テュービンゲンでドイツ人女性と三度目の結婚を行うためだったようで、6月から7月にかけておそらく半月ほど滞在している。ベーレントが最終的にドイツに帰国するのはその3か月ほど前の3月31日。用意周到に打診や準備をした結果である。ライフワークに関しては、マルバッハのシラー・ミュージアムに、彼のコ

レクションや研究資料を中心としたジャン・パウル資料室が設けられ、そこを仕事部屋として取り組めることになる。収入に関しては、「5万マルクを拠出してマルバッハのシラー協会が、シュトゥットガルトのアリアンツ生命保険社との間で、終身月額600マルクの年金をベーレントに保証するという契約」を結んでくれる(212)。再訪の際も、マイアーはベーレントを訪問するつもりではいたようだが、妻の実家テュービンゲン、彼の実家ニュルンベルク、そして妻のヴィザのことで何度も赴く必要のあったアメリカ領事館があるフランクフルト、この間を忙しく駆け回らなければならなかったらしく、結局再会はできなかった。アメリカ帰国後のやり取りはマイアーの側からはパスデイカードが主で、ベーレントからは送られた本や抜刷への礼状が中心で、双方共に生活が落ち着きを取り戻した様子がかがえる。

マイアーの三度目のドイツ訪問は、客員教授として1 Semesterだけハンブルクへ招聘された1961年。このときも、手紙のやり取りはあるものの、会うことはなかった。このころのマイアーは生活も仕事も安定しているようで、マイナス面よりもプラス面を報告するようになっている。テュービンゲン大学文学教授ヒルデブレヒト・ホムメル(1899-1996年)の娘との三度目の結婚が大きな契機となったのではなかろうか。ベーレントの方も『資料校訂版』の発行が順調に進み、1963年のジャン・パウル生誕200年祭を迎えることができ、心配なのは高齢から来る自身の肉体と精神力の衰えのみであるかのようなようである。「特に記憶力がとても悪くなって、もう何も覚えていられず、全部忘れていき、その結果仕事の進み具合も蝸牛の歩みです」(168) —1966年11月11日付け書簡での嘆き節だが、一方で同じ個所で、シラー・ミュージアムが急速に大きくなりすぎてざわざわしていて居心地が悪く感じられるときがあるとも漏らし、「完全に呆けてしまわないうちに」また来てほしいといったことばも出てくる(167)。



2013年3月21日のヨーディッツ（ジャン・パウルの故郷の一つ）「ジャン・パウル資料館」前の広告柱除幕式（筆者撮影）

このときすでに80歳を超えているベーレントは、旅をするにも「付き添いなしではもう行く気にはならず、その付き添いも見つけ難いことがほとんどで」、当然ながら、「私の友達も男も女も年寄なので死んでしまっている人がとても多い」のだと書く（168）。20歳年下とはいえ、マイアーとの文通による付き合いは、ある意味でいかに公私にわたって濃密であったことか。この書簡がベーレントからの最後のものとなり、その後のマイアーの3通の手紙には、返事はなかったのだろう。

(8) 記憶と忘却

2013年はジャン・パウル生誕250年ということで、ドイツでは一年を通じて、ジャン・パウルゆかりの至る所で記念行事が行われた。年初に一年

にわたる行事予定が公表されてほぼ完全に予定通り実行された。誕生日の3月21日はドイツ及びチェコの25箇所でリトファスゾイレ広告柱の除幕式が行われ、講演会・朗読会・音楽会・資料展・シンポジウム・学会・演劇上演が目白押しだった。しかし一方でバイロイトではワーグナー生誕200年・没後130年と抱き合わせの感があり、催し物は全体的に民より官の主導という感じもした。ところで2013年が、その人生をジャン・パウルに捧げたエドゥアルト・ベーレントの生誕130年・没後40年の記念の年だったと気づいた人がそもそもいただろうか。本稿で取り上げた『往復書簡』の出版もそのことと関係していたとは思えない。ベーレントは「しめしめ」と思っているかもしれない¹⁹⁾。

注

- 1) 詩人で同僚だったルートヴィヒ・グレーヴェ (1924-91年) の描写がいかに的確であったかを、今回改めて確認できた感じがした。その描写は『ツァロートの道 ユダヤ歴史・文化研究』(中央大学人文科学研究所・編, 2002年, 中央大学出版部) 所載の拙稿「いとも幸福な出会い—ジャン・パウルとユダヤへの小さな散歩」におよそ1ページにわたって引用している (64頁)。
- 2) ここで主に扱う二人のゲルマニスト及び少しだけ触れるその他のゲルマニストの経歴等については、ほぼすべて『Eduard Berend und Heinrich Meyer Briefwechsel 1938-1972』(Hrsg.v. Meike G. Werner, marbacherschriften neue folge. 10, 2013, Göttingen) によっている。ベーレントに関しては、マイアーに書いて送った自筆の履歴書が載っている (11-12)。文中の括弧内の数字はこの本の頁である。
- 3) Festgabe für Eduard Berend, zum 75. Geburtstag am 5. Dezember 1958, hrsg.v. Hans Werner Seiffert und Bernhard Zeller, 1959 Weimar, S. 467-479.
- 4) これは年に複数号出ていて1932年まで続く。1950年からは装いも新たに「Hesperus」として刊行され、1966年からは年刊の「Jahrbuch der Jean-Paul-Gesellschaft」に移行し、これは今も刊行され続けている。
- 5) 1巻と2巻は1922年、3巻は1924年、4巻は1926年に刊行。
- 6) Jean Pauls Sämtliche Werke, 3. Abteilung, 6. Band, S. IXf.
- 7) 戦後東独でベルンブルクの城内ミュージアム館長となり (1946-52年),

1952年に西独に移住。その後アメリカでドイツ語教授となる (269)。

- 8) Festgabe für Eduard Berend, aa.O., S. 298.
- 9) 退職の理由として、ルーゼルケが、資金的援助をしてくれた共同設立者の一人で国語教師だったユダヤ人アンニ・ライナー (1891-1972年) を追い出そうとしたことをマイアーが許さなかったためと言われているが (234), たしかに潔癖さがマイアーの性向の一つと言えるのかもしれない。
- 10) 1938年, H・K・ヒューストン・マイアーのペンネームで『コンラート・ボイムラーのさらなる道。テキサスドイツ人小説 (Konrad Bäumlers weiter Weg. Ein Texas-Deutscher Roman)』という作品をシュトゥットガルトの出版社から出している。
- 11) 哲学教授エドゥアルト・シュプランガー (1882-1963年) のこと。
- 12) 中野光治『ジャン・パウル』春秋社, 1936年。
- 13) 引っ越し通知が1941年1月18日付けのはがきでなされていて, その前の手紙の日付が1940年12月19日だから, 1940年の年末か, 1941年の年初かに引っ越したのだろう。
- 14) ベーレントは以前書簡の中で収容所を出てからずっと毒薬を持ち歩いていると書いていた (51)。いずれも自分の家族を持たない姉と3兄弟の間で, いざという時には毒を呷るという申し合わせがなされていたのかもしれない。
- 15) つまり6巻から8巻までが出たあとで, 1-4巻が改めて刊行され, そのあと5巻が刊行されることになる。
- 16) Vgl. Jean Pauls Sämtliche Werke, 3. Abteilung, 9. Band, S. 8. 解説で「ハインリヒ・マイアー博士・提供」と記されている。
- 17) Books Abroad 31. そこでは「テキストの3分の2はベーレントの生涯と作品に捧げられている」らしい (213)。
- 18) 注3) の作品。
- 19) シラー・ミュージアムには「ベーレント関連資料」とでもいったようなものが保管されているらしい。興味があるのは彼の「日記」と「ジャン・パウルとユダヤ人」という未発表の論考である。また, ベーレントの姉兄弟のこともまだ全く分かっていない。特に姉のアンナとのベルリンでの暮らしのこと, ベーレントがスイスへ出国してからの姉の生活のこと, 音楽家だった弟のこと等々, 20世紀の忘れものとして拾い上げられるのを待っている感じがする。したがって本稿は「序章」である。